

一人ひとりを大切にする具体的な保育

5

幼児の保育の手立て

ユリア
愛知県碧南市・へきなん保育園園長

1 遊びの環境を整える

前回まで、乳児の保育について述べてきました。今回は、幼児の保育について、具体的にどのように取り組んできたかをお伝えします。

1年目は乳児の遊びの環境を整えることに夢中で、幼児の保育にまで思いが至らなかったのです。連載第1回で、2歳児の1クラスから遊びの環境を整えて、言葉掛けも一斉にするのではなく、伝えたいことがある子の近くに行つて、その子に話すという実践をしたクラスの子たちの育ちが素晴らしく、落ち着いて話が聞けるように育つていった、と述べましたが、幼児については「いったいどうしたらよいのか」という疑問を持つところから始まりました。

やはり、遊びの環境を整えることは必須条件だろうということで、数えるほどしか玩具が出ていなかった現状を、とりあえず、あるだけの玩具を集めて部屋に設定することにしました。しかし、充分な棚がありません。棚もおいおい買い揃えとして、まず、今ある環境でロッカーを整理整頓して、空いたところを玩具の棚にしたりしました。

そして、今まで一斉にしていた絵を描く、ワークをするなどの活動を、丁寧に保育できる人数ずつで進めることを担任たちは考えてくれました。

そうしているうちに、机と椅子を人数分置かなくてもよいということになり、数を減らすクラスも出てきました。机と椅子を減らすことで、遊びのスペースを確保できるようにになりました。

しかし、同じことを4、5人ですること

を、2、3人ずつするということは、保育士にとってはとても時間がかかることですが、一人ひとりの発達を見るという意味では、本当に丁寧にみるができるようです。今まで一斉にしている時に気づけなかったことにも、気づけるようです。例えば、普通に1、2、3、4、5などと数えられていても、実際概念が形成されていなかったりすることもあります。「何が理解できていて、何がわからないか」がわかり、個々の発達に寄り添った保育ができるようです。

2 食べたい子から食べ始める

机の数を減らすと、昼食はどうなるのでしょうか。今、私の園では全員一緒に食べることはしていません。なぜかというと、それぞれのタイミングで遊びのキリをつけて、席が空いていたら食べたい子から食べ始めています。食事の準備が始まると、早々に遊びのキリをつけて、座って待っている子の姿があります。

皆で食事をしている時は、保育士の「食事ですよ」の合図で皆席に着いて待っている姿がありました。同じ待っている姿でも意味が違います。それは、保育士が「待ってね」といったから、保育士の指示によって待っていることと、自分でおなかがい



たから早く食べようと思い、遊びのキリをつけて、席を確保して自発的に待っているという違いです。

食事を皆で一緒に摂るといことはよいことだと思えます。また、日本の食育にも含まれることだという考えもありますが、20人、30人の家族つてあまりないかもしれませんが、そんな。そして、実際食事の席に着いてからかなり長い時間、待っていることがあ

るようです。待つことが悪いことではありませんが、長い時間待たうえに、決められた量を個々のニーズにかかわらず「残さ

ずばなさい」ということは、小さい子にとってはなかなか大変なこともかもしれません。私の園では、子どもたちは自分のおなかのすき具合を自分で感じ、自己決定して食べています。しかし、大人の都合もいろいろあるので、「〇時ぐらいまでには食べてね」と伝えてあります。こうした方法にも、子どもたちはすぐに慣れてくれました。

以前、毎月1回、一人暮らしの高齢者の方を食事に招待していました。食事の形式をどうしようと考えましたが、食事を自分のタイミングで食べる形式で、お客様をお迎えることにしました。しかし案の定、お客様より先にさつさと食べてしまう子どももいて、理由を知らないお客様には、なんだか失礼な感じになってしまいました。

そこで次の月には、子どもたちに「今日はお客様をお迎えるので、皆で一緒に食べるよ」と伝え、一緒に食べました。もちろん何の問題もなく、子どもたちは待つことができました。一人ひとりを大切にすることで、集団での行動が難しくなるということはないようです。

こうした食事を続けて、ある時気がついたら、子どもたちが姿勢よく食べている姿がありました。ガラガラ食べている姿は一人もありません。そのことは私たち自身が驚き、感心してしまいました。

どうしてそういうふうになったのか。静かにしなさい」「集中して食べなさい」「姿勢よくしなさい」といった言葉を掛けていくわけではないのです。日常の積み重ねで、結果として、こうした素晴らしい姿を見せてくれるのです。なぜかと考える時、誰かに指示されたから行動するのではなくて、日常の中で、毎日自分で考えて行動することをしているからではないかと思えます。自発的に行動している、また遊びの中で様々に身体を動かすことにより、身体の発達が促され、結果として、姿勢がよくなっているのではないかと考えています。

3 保育士が客観的に自身を見直す

こうした取り組みを始めてしばらくたった時、私が園庭で草取りをしていたら、保育士の「はい、今から食事にしますよ」という、子どもたちへの声掛けが聞こえてきました。ふと「この言葉掛けが必要かな」と思い、その保育士に「そういうわかないと生活が進まないかな」と聞いてみました。すると、「習慣的にいつていきましたが、声を掛けなくても子どもたちはわかっていると思います。自分の区切りのためにいつていたかもしれません。全体に向けての声掛けはやめてみます」という返事が返ってきました。

●ワークをやっている子（4歳児）と遊んでいる子



もちろん、その声掛けをやめても何の不都合もなく、子どもたちの生活は問題なく続いていきました。「食事ですよ」と声を掛けることが、なぜよくないことなのか」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、言葉を掛けること自体はよいのですが、「言葉を掛けることにより、大人が指示したら何かが始まる」「大人の合図で生活が営まれていく日々になっている」という見方ができます。そこで、見方を変えると、子どもたち自身が生活の見通しを持って、日々を「すこす」といった日常に切り換えて

いく、具体的な実践の取り組みとなっていくのです。

保育士自身それぞれが「自分はどんな言葉掛けをしているのか」と客観的に見てみる、そして、それぞれが自身で気づきを得ていく時に、保育のスタンス・意識が、「させる」から「支える」に少しずつ転換していくように思います。

4 肯定的で温かい言葉遣い

私の園では、ある時、子どもが「先生、トイレ行っていいですか？」と聞いていました。その言葉に、1人の保育士が「排泄は生理現象なのに、許可するというスタンスはどうか」と疑問に思いました。そこで、子どもの所在を把握する必要があるのでは、「トイレに行ってください」という伝え方でいいと考えました。どちらでもいいようなことかもしれませんが、こうした小さな気づきとそれに伴う変化（具体的な実践）が、一人ひとりを大切にする保育につながっていきます。

こうした取り組みを行きつ戻りつしながら続けていくうちに、園内で保育士が話す言葉遣いが、いつの間にか指示命令ではなく、肯定的で温かい言葉に変わっていました。

一つひとつ、小さなことで、特別なこと

ではありません。丁寧に考え、行動していくことを重ねていくことで、自然に子どもの姿に反映されてきます。その結果、当然のこととして、子どもたちどおしの言葉遣いも、否定や非難することなく温かい言葉であふれているように感じます。つくづく子どもたちは、大人の私たちを映す鏡のようだと思えます。

目の前の小さなことを一つひとつ実践していると、いつの間にか全体的に大きく変化したり、成長を見せてくれることがとてもたくさんあります。こうした日常の中で、「ホリスティック」という言葉が思い浮かんでいきます。一つの小さな気づきや実践の積み重ねが、全体的な発達を促すことに無理なくつながっていきます。別の言葉で表現するのなら、「全人教育」という表現もできると思います。一人ひとりを大切に保育することは、それぞれの全人格を育てていくことに無理なくつながっていくということです。

5 「課業」を新たに学ぶ

前述のように、いわゆる設定保育については、丁寧に見られる人数ずつで進める方法を保育士が考えて実践していますが、「課業」という方法を新たに学ぶことになりました。子どもの自発的な遊びを守り、保障

- ① 祖父母を迎えて外遊び（幼児）
- ② 室内遊び（5歳児）



①

する中で、最大の発達を保障し、引き出すことと同時に、幼児については、大人が意図的に学びの機会を提供していくことが大事です。

今までの設定保育の中にもこうした考えは含まれているのですが、できれば小手先ではなく、本当におもしろいと思えるような活動、保育士自身も目を輝かせてできることを見つけたら素敵だと思います。私は、「何かおもしろいことをしたら」とよく伝えています。そうはいつでも現実的には年間テーマがあり、それから月のテーマを

持つて課業を行っています。これがなかなか、苦戦しています。

ある年から、年間テーマと月のテーマを幼児全クラスで同じにしようということになりました。今年の年間テーマは「自然・社会」、ちなみに9月のテーマは「身体」、10月は「季節」、11月は「素材」となっています。

同じテーマにすることで、教材の準備など互いに助け合えるのではないかと考えたからです。これは大人の都合ですね。本来は、その時々の子どもの興味関心や、情報を見ながら、領域にあることを毎週1回は



②

- 室内遊び（3・4歳児）



行っていくものですが、このことに関しては未だに試行錯誤中です。

ただ、保育の現場は日常を大事にしながら、あれこれ皆で考えながら前向きに取り組んでくれています。そんな職員の姿を、嬉しい気持ちで見守っています。